
金魚の海

あかふくもち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金魚の海

【Nコード】

N7086I

【作者名】

あかふくもち

【あらすじ】

大好きな姉、大嫌いな姉。
憧れた姉、けっしてなりたくないと思った姉。

主人公の姉に対する複雑な愛憎を短いお話で描くことを目指しました。

（前書き）

いつもを少女向けファンタジーを書いていますが、今回は学生の頃に書いた（ちよつと気取った感じがする）短編をひっぱりだしてみました。

律子はインターホンの音に目をさました。西向きの窓からは、夕方の日差しが鋭くさしこみ、薄暗い部屋の中に濃い陰影をきざんでいる。座布団から頭をもちあげ、けだるい体をひきずるようにして起きあがる。短い髪をざつと手で整える間にも、インターホンはせわしなく連打され、せまい部屋に鳴り響いていた。安普請なので音はほとんど周囲の部屋に筒抜けで、近所迷惑この上ない。

「はいはいはい……」

律子は脱ぎ捨ててあったジーパンに足を通し、チャックをひきあげながら、のろのろと扉をあけた。

「いるならさつさと出て来い」

扉の向こうで立っていたのは、三十前の男だった。ぼろアパートの廊下を背景に背負うのにまったく似つかわしくない。ぱりっとしたスーツを着、ネクタイをきっちりと締めている。

「なんだ、兄貴か」

律子が頭をかきながら露骨に嫌そうな顔を見ると、相手もあからさまにむっとして「なんだとはなんだ」と早口で言った。

「父さんじゃあるまいし、しつこくピンポンならすのやめてよね」

「お前が出てこないのが悪いんだろっ」

「あー、せっかちな男ってみっともな」

憎まれ口をたたきながら律子は兄、直久を部屋に通す。

「あいかわらず何もない部屋だな」

「せまいからね」

小さな冷蔵庫のそばにしゃがんで、麦茶を出しながら答える。兄がこの部屋にやってきたのはたしか半年ぶりぐらいのことだ。律子のおばえているかぎりで変わったところといえば、壊れたテレビを捨てたことぐらいである。

「奈津美さん、男の子か女の子かもうわかったんでしょ？」

「女の子だ。昨日分かった」

「ふうん。はい、ソチャですが」

飲み屋でもらった麒麟ビールのロゴいりのグラスに、しぶくなつた麦茶をなみなみと注いで手渡す。畳の上であぐらをかきながら、グラスを受け取った直久は、見れば見るほどにこの部屋から浮いた存在だった。

直久は都内の某有名私立大学を卒業し、そのまま大手の銀行に就職した。数年前に大学時代の同級生で、長年付き合っていた奈津美という女性と結婚し、秋には子供も生まれる予定だ。高校卒業以来、バイトで生計をたててぶらぶらしている律子とは似ても似つかない、まっとうな人生をおくっている。

「で、今日はなににきたわけ？」

律子は麦茶を片手に、窓に近い壁にもたれかかつてすわる。

「その様子だと、やはり行かなかつたようだな」

直久は、銀フレームのめがねの奥から律子を見すえ、言った。

「行かないって最初から言ってたじゃない」

笑いながら答えると、直久は律子から視線をはずし渋い顔で麦茶を一口のみ、

「たつた一人の血のつながったお姉さんだろう。どうして——」

「あのさあ」

律子は直久の言葉をさえぎって、ずるずると畳の上に寝転がった。しみだらけの天井と、窓の外の薄い水色の空。軒先に干した下着に、蝉がとまっているのをながめながら、律子は話し始めた。

「母さんとあたしの父親が離婚する前のはなしだけどさ、家の近くで、夏休みの終わりに毎年ちっさなお祭りがあつたんだ」

「祭り？」

直久は突然はじまつた律子の脈絡のない話に、わけが分からないという顔をした。両親が離婚する前、律子はI県にある海辺の港町に家族と一緒に住んでいた。母が直久の父と再婚して引っ越しをしてからは一度も訪ねたことはないが、おそらく町並みはほとんど変

わっていないだろう。潮風のせいで時間までもがさびついてしまったような、閉鎖的で寂しい田舎だった。

「お姉ちゃんとふたりで、おじいちゃんからお小遣いもらって、こんながま口の財布に小銭入れて首からさげてさ。出店で買い物するのが楽しかったんだよね」

寝転がったまま、指で財布の形をつくってみせる。

「でもね、ひとつだけ買っちゃいけないものがあつたの。なんだからわかる？」

「いや」

直久の方に寝返りをうつて、律子は言った。

「金魚。飼えないし、すぐ死んじゃうから、金魚すくいは絶対しちゃだめって言われてた」

「もつともだな」

「言うと思った」

直久らしい感想に、律子は小さく笑いながら、続ける。

「だけど――離婚するちよつと前だから、多分小三の時かな。あたし、金魚すくいがどうしてもやりたくてお姉ちゃんに駄々こねた」

姉は、「だめだよ、お父さんにしかられるよ」と、なんとか律子をなだめすかそうとしたが、律子は聞かなかった。すれ違う浴衣姿の人々が指さきにぶら下げた、ビニール袋の中の小さな朱色の金魚が、あの日に限ってうらやましくてならず、地べたに座り込んで泣き続けた。

「とうとうお姉ちゃんも折れて、一回だけやったの。それでとれなきやよかったのに、たまたま一匹だけとれちゃってね。そのときはうれしかったんだけど、帰るときになつたらやっぱりこまるでしょう。捨てていくわけにもいかないし」

赤い紐のついたビニール袋の中で、ちようちんの灯りをうつして静かに揺れる水と、小さな小さな金魚。

「こまつたあたしとお姉ちゃんは、帰りに浜辺に寄ってね、その金魚を海にはなしたの」

「淡水魚を海に放したりしたら死んでしまうだろう」

「そう。でもそれをあたしが知ったのはずっと後だった。とにかく水の中でなら金魚は生きていけるだろうと思ってたんだよね」

子供のころの自分の無知をいとおしむように律子は静かに笑う。

「夜のまつ黒な海に消えてったちっちゃな金魚のこと、浜を通りかかるたびにどのくらい大きくなったかなあって、お姉ちゃんとよく話した。お姉ちゃんは、金魚が海じゃ生きていけないこと知ってたはずなのに、にこにこ笑ってた」

そこまで言って、律子はゆっくりと目をとじた。姉はどんな気持ちだったのだろう。あの祭りの晩、暗い海に金魚をはなしたとき。もういるはずのない金魚のことを、律子と楽しそうに語っていたとき。

「それがなにか関係あるのか」

目を閉じたきりで黙りこんだ律子に、直久が静かな声でいった。

「お姉さんの葬式に行かないことと」

「ないよ」

目を閉じたまま、律子は短く答えた。叔母からの電話で、姉があの田舎の海で恋人とともに入水自殺をしたと聞かされた時。思い出されたのは、黒い海に消えていく、ちようちんの灯にきらきらと輝いた小さな金魚の姿だった。目を開き、薄い色の空を見ながら、律子は言った。

「お墓まいりには、もうちょっと涼しくなったらいくつもり」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7086i/>

金魚の海

2010年10月8日15時07分発行